明治150年記念

「やまぐち未来維新」学生作文コンクール

優秀作品集

2018 明治150年

維新胎動の地
山口県

明治150年記念事業山口県推進協議会

〈目　次〉

中学生部門

最優秀賞

「鉄道の父」井上勝　私立慶進中学校　二年　谷　漱大　1

優秀賞

先生の至誠を受け継いで　山口市立鴻南中学校　三年　有馬愛里菜　3

私の一番身近な偉人・伊藤博文　柳井市立大畠中学校　三年　有吉　優芽　5

誠の心　宇部市立川上中学校　三年　宮本　怜美　7

高校生部門

最優秀賞

吉田松陰先生の思想と行動に学ぶ　山口県立萩高等学校　一年　國廣奈菜子　9

優秀賞

山根孝中から学んだこと　山口県立萩高等学校　二年　谷口　愛美　12

郷土の先人「正木退蔵」に学ぶ　山口県立萩高等学校　二年　田村　和輝　15

「鉄道の父」井上　勝

慶進中学校　二年　谷　漱大

私は明治維新の主翼となった長州ファイブの偉人たちと同郷であることに誇りを持っている。中でも、私が一番尊敬しているのは、「鉄道の父」という異名をもつ井上勝だ。

私は、無類の鉄道好きである。私は美祢市に住んでいるが、宇部市の中学校に毎日鉄道を利用して通学している。ＳＬやまぐち号の乗車はもちろんのこと、最近であれば、やまぐちＤＣオープニング号を撮影したり、鉄道模型をジオラマで走らせたり、青春一八切符で家族と旅行するなど、鉄道は、もはや私の生活の一部である。

そんな私を魅了してやまない鉄道が日常の中で存在しているのは、まぎれもなく井上勝が成し遂げた偉業のお蔭である。

「鉄道」それは、今や日本人の足であり、それと共に安全性と優れた高度技術を世界に誇示できるものである。

この鉄道を初めて日本に敷設し、鉄道の繁栄に人生を捧げた人こそが井上勝である。

井上勝は、天保十四年、長州藩士井上勝行の三男として現在の山口県萩市に生まれた。勉強熱心だった彼は当時、まだあまり認知されていなかった英語を習得し、文久三年、外国旅行という名目で密航し渡英した。この時、のちに長州ファイブと呼ばれる伊藤博文、井上馨、遠藤謹助、山尾庸三も同乗しており、皆、明治維新の中枢を担った人物だと思うと、当時いかに日本が欧州などの諸外国より遅れをとり、それを危機的状況だと彼らが感じ取ったかということが推察される。

特筆すべきは、危機的状況だと感じて悲観的になるのではなく、その事実を糧に彼らが日本を変えようと改革を行ったことである。その中でも英国での鉄道の利便性を知った井上勝は、日本の繁栄には鉄道が必要不可欠だと、考え、日本の鉄道敷設に尽力したのだ。

私が井上勝を最も尊敬している最大の理由は、彼が尋常ならぬ行動力の持ち主だからである。幕藩体制からの転換機に数々の同世代の知人が出世し、政治の世界で輝かしく活躍する中、彼は日本の技術革新と産業の発展のために、ひたすら鉄道に人生を捧げ、並々ならぬ努力を重ねて見事に成し遂げた。その根性と一度決めたらどんな困難が襲いかかろうとも真っ直ぐひたむきに突き進む行動力は、計り知れない。

私たちは、この根性とひたむきに苦境を乗り越えようとする精神を見習い、これからの日本を担って、いかなければならない。

少子高齢化問題や、外交問題など解決に一刻を争うような問題は山積しているが、早期に対策を考え実行していく行動力が必要となる。

また、私は井上勝の未来を予測する能力にも大変憧れを抱く。

彼は、初めて鉄道を目にした時から、人々が日本中を自由に行きかい、物流が発展することによって日本の経済も発展していくことを予測していたのだ。彼の予想通り、鉄道によって日本の物流は飛躍的に発展し、それに伴い経済も軍隊も発展していくこととなった。

未来を予測する能力は、行動力と同様に今後の日本を担う私たちにとって重要となる。

二十一世紀の井上勝となるべく、これから先どのようなことが起こるかを予測し、最善を尽くしていくことが日本の更なる発展に繋がるのだ。

先日、天皇陛下が生前退位を発表され、平成三十一年から新しい年号に変わることが決定した。新たな時代の始まりであり、私たち若い世代がスタートをきるチャンスでもある。

井上勝のように、未来を見据え、新しく輝かしい時代を切り開けるよう、まずは、自分の将来の目標に向かってたゆみなく努力していこうと思う。

先生の至誠を受け継いで

山口市立鴻南中学校
三年　有馬　愛里菜

私が尊敬する先人は、幕末の思想家「吉田松陰先生」です。松陰先生は山口県萩市に生まれ、三十才という若さで、この世を去りました。それでも討幕戦を勝利に導いた、高杉晋作や初代内閣総理大臣である伊藤博文など、数々の偉人を育てられました。

私が松陰先生を尊敬する理由は、先生が至誠をもって天寿を全うされたからです。至誠というのは、真心、最高の誠意という意味です。しかし先生はこの言葉の意味を、真心、最高の誠意といった意味ではなく、志をはっきりさせ、志を実行することが誠であり、その誠を貫き通すことが、至誠であるとされています。

至誠という言葉は、先生が大切にされていた言葉です。先生が残された数多くの言葉の中にも、この至誠という言葉は、たくさん使われています。

先生の残された言葉は、どれも自分の価値観と似ていたり、全く違っていたりして、様々なことを考えることができました。そして、先生の言葉を知ることで、人はどうあるべきなのか知ることもできました。

先生は、日本をより良くしようと、鎖国の時代にもかかわらず外国の軍艦に乗って外国の様子を勉強しに行こうとしたり、安政の大獄の時に捕まっても、命乞いをしようとしたりせず、自分の思っていることを正直に告白したりなさいました。私は、あの幕末の時代に本当に国のことを憂い、変えようとした人物は、松陰先生だと思います。

先生は、亡くなられる前に「自分の学問修養が浅いため、至誠がその力をあらわすことができず、幕府の考えを変えることができなかった」と文に書かれました。でも、たとえ幕府の人々に先生の想いが届かなくても、家族や門徒達には届

いているのではと思いました。決して他人のせいにはしないその姿勢に、私は感動しました。

私が先生から学んだことはたくさんあります。

一つ目は志を立てることです。先生は何事をするにも、しっかりとした志を立てることが、大事だとおっしゃっておられたそうです。先生のように立派で国に貢献できるような人になるためには、まず志を立てることが、大事だと思いました。

二つ目は何事にも真心を尽くし、全力で取り組むことです。真面目に、そして一生懸命に取り組めば、必ず報われると信じ、何事にも全力で取り組もうと思いました。

三つ目は感謝の気持ちをいつも忘れないことです。先生はいつでも家族や他人への感謝の気持ちを忘れませんでした。私も日頃お世話になっている人への感謝の気持ちを忘れずに、いつか恩返しができるといいなと思いました。

最後は学問を始めたら、やり終えるまで強い心を持ってがんばりぬくということです。

先生は亡くなられる直前まで強い心を持ってがんばりぬかれました。私も今年は受験生なので、強い心を持って、苦しくてもがんばりぬこうと思いました。

先生から学んだことはどれも大切で、自分を律することのできるものばかりです。そのお蔭で、私は勉強や部活などもくじけずにやれています。これからもその教えを大事にしていきたいと思いました。

松陰先生は、本当にこの国のことを憂い、そして愛されていたのだなと思いました。私は、自分の命を犠牲にしてまで至誠を貫き通し、国を変えようとなさった先生を本当に尊敬します。そして、同じ山口県出身だということがとても誇らしいし、うれしいです。

先生が愛した日本、そして山口県のために、私が今できることは何かを考え、先生に少しでも近づきたいと思いました。そして、先生の至誠を受け継ぎ、立派な人になりたいです。

私の一番身近な偉人・伊藤博文

柳井市立大畠中学校
三年　有吉　優芽

私の祖父の家は光市の旧大和町にあります。

六年生の時、祖父に「伊藤公資料館に行って見る？」と言われました。私は「伊藤博文」という名前は知っていましたが、まさかこんな身近な地域に住んでいたとは思ってもいなかったので、「うん。行ってみたい。」と返事をしました。資料館に入って奥に行くと、伊藤公の生家が復元されていました。茅葺きの屋根で小さな家でした。私はこんな田舎の小さな家から、初代内閣総理大臣になった伊藤公は並々ならぬ努力をしてきた人なんだと思いました。私も田舎に住んでいますが、目標を見失わないように、伊藤公の努力を真似してがんばろうと思いました。

明治時代は、今のように外国の航路が発達していませんでした。しかし、伊藤公は、「岩倉使節団」の副使として各国をまわりました。

昔は、一つの国に行くのに、何日もかかっていましたが、伊藤公たちは、めげずに西洋の文化を学ぶために海を渡っていたと思うと、日本の改革のために、自分から行動を起こしていてかっこいいと思いました。

私も三年生としてリーダーシップを取らないといけないので、伊藤公が国民を引っぱったように、私も学校のみんなを引っぱれる存在になりたいです。

また、岩倉使節団は外国へ行くため、英語を話さないといけません。しかし、そのころの日本は、普通教育が少しずつ発達している段階ですから、今のような英語が学べる学校があるはずがありません。ですが、伊藤公は、その困難を乗りこえて外国の人たちと話をし、西洋文化を学んでいました。私は英語が苦手ですが、現代には教科書はもちろん、問題集や英語専門の先生がいます。こんなに恵まれた環境の中で生

活しているのだから、すぐに苦手と言わずに、勉強していかなくてはいけないと思えるようになりました。そう思うと、伊藤公は資料も少ないのに、外国の人と日常生活の話ではなく、難しい政治の話ができていたので、相当な努力をしていたと思いました。どのように、勉強していたのか知りたいです。

日本に帰国してきても、日本の中心人物として活躍していた伊藤公。すぐに内閣制度をつくり、日本初の内閣総理大臣になりました。

私は、伊藤公は日本に帰国後すぐに改革を始めたので、私も何かやりたいことがあれば、「できるかな」と考える前に行動してみようと思います。

伊藤公は、内閣制度をつくっただけでなく、憲法もつくりました。そのために日本の政治によく似た、ドイツの「ワイマール憲法」を参考にしました。そして、日本の憲法をつくるために、横須賀の夏島にこもって考えました。私は、伊藤公が自分の国と似ている国の憲法を参考にしたことは、とてもいいことだと思います。なぜなら、学校の先生もよく「人のいいところは、盗みなさい」と言われるからです。

私は、まさに伊藤公はこの言葉どおりにしていると思います。だから、伊藤公は「大日本帝国憲法」を完成させることができたのでしょう。

これまでの話から、伊藤公は武士が世の中をまわしていた江戸時代から、天皇中心の世の中になった明治時代をつくり上げた人々の中の一人であり、中心人物だったと思います。

普通なら、都会の有名な家の人が初代内閣総理大臣のはずです。しかし、本当になったのは、田舎者の伊藤公です。私は、田舎者でも日本を、世界をも変えられる人物になれるということを知り、伊藤公から勇気と挑戦ということに気づかされました。

そして、現代の政治の人物を見てみると、内閣総理大臣は山口県出身の人が一番多いのです。それは、その人ががんばったからなれたのだと思いますが、その人たちが政界に入ろうとしたきっかけは、伊藤公がいたからかもしれません。

だから、私はこの山口の偉人、伊藤博文のすばらしさを、たくさんの人に、くわしく広めていきたいです。

誠の心

宇部市立川上中学校
三年　宮本　怜美

私が最も尊敬している山口県出身の偉人、なんといっても「吉田松陰」である。山口県では、吉田松陰のことを親しみと尊敬の念を込めて「松陰先生」と呼ぶ人もいる。私もここで、松陰先生と呼ばせて頂く。

今年の夏休みに、千葉の親戚と家族で世界遺産となった萩の松下村塾に行った。そこで私は、松陰先生についてあらためて多くのことを知ることができた。松陰先生は、私塾である「松下村塾」で、久坂玄瑞や高杉晋作、伊藤博文など、後の明治維新で重要な働きをする多くの若者を育てたことで有名である。

とても学問が好きな方であったが、一方で、大罪を承知の上で脱藩をしたり、異国船に忍び込んだりと、学んだことから何をすべきか真剣に考え、実際に行動に移す方でもあった。時に、その思いの強さがルールを超えてしまい、何度も牢屋に入れられたが、いつも穏やかな様子でふるまい、最後まで大きな志を抱いていたと言われている。そんな松陰先生は、数々の名言を残している。どれも真剣で、私の心に突き刺さるものばかりであるが、その中でも私がとても大切にしている二つをここで紹介したい。

ひとつは「夢なきものに理想なし。理想なき者に計画なし。計画なき者に実行なし。実行なき者に成功なし。故に、夢なき者に成功なし」という言葉である。まず、夢を持ち、その上で、しっかりとその理想に向かって計画し、実行していかなければ成功などできない、というものである。

学生である私にとって、この言葉は本当に大切なもので、日常の勉強や部活で大変なときや、時折嫌になるときなど、この言葉を思い出して、力をもらっている。

もうひとつ、私が一番大切にしている松陰先生の言葉がある。それは、「至誠にして動かざる者は、未だ之れ有らざるなり。」である。

これは、「精いっぱいの誠意、つまり誠の心をもって相手に接すれば、それで心を動かされない人はいない。動かすことができないときは、自分の誠の心がまだまだ尽くせていない証拠である」というものである。

この言葉は、孟子の「離婁章句」の一部であり、松陰先生自身、その言葉が心に響き、松下村塾の塾生をはじめ、その信念で常に人に接したと言われている。私は、この言葉の意味を知ったとき、心を突き動かされる思いがした。今まで、相手が自分の思うように動いてくれないときや分かってくれないとき、すぐに人のせいにしてしまっていた。この言葉に出会い、そんなときは、まだまだ自分の一生懸命さが足りないのかもしれない、誠の心が尽くせていないのかもしれない、と考えられるようになった。

「至誠」。松陰先生が最も大切にしていたこの言葉のお陰で、私は考え方を変えることができた。

私は今十五歳。松陰先生は私よりずっと若い十一歳で藩主に「武教全書」を講義したり、同い年の十五歳ではあらためての講義の機会に激賞を受け、褒賞もされている。全くもって私とは、レベルも次元も違う先生であり、比べるのもおこがましい話であるが、私はこの作文で紹介させていただいた松陰先生の二つの言葉を胸に、しっかりとした志を持ち、これから先、自分のためだけでなく、世の中の役に立ち、少しでも周囲の人のために、できることをしていこうと思う。

「至誠にして動かざる者は、未だ之れ有らざるなり」

山口県で生まれ、松陰先生に出会うことができ、素晴らしい考え方を教えていただいたことに、心から感謝したい。

吉田松陰先生の思想と行動に学ぶ

山口県立萩高等学校
一年　國廣　奈菜子

私の将来の夢は中学校の教師になることである。これは小学生の時から抱いてきた夢だ。幼いころから友達に勉強を教えてあげることがとても好きだったし、また、父が教師ということもあり、その影響があったのかもしれない。

この夏休みに、教師になるための高校生セミナーや大学の教育学部のオープンキャンパスに参加し、いろいろなお話を伺った。この経験を通して私はいっそう教師になる思いを強くしたが、反面、自分に足りない面を考えさせられる機会ともなった。それは、教師になるといっても、自分はどんな教師になりたいのか、生徒に一番伝えたいことは何であるのか、ということが自分の中で十分明確になっていなかったということである。

そこで、私は、尊敬する幕末の郷土の偉大な教育者、吉田松陰先生の思想と行動から、自分はいったいどんな教師を目指すのか、何を生徒に伝えたいのかを改めて熟考することにより、次の五点について努力を重ねていくことを決意した。

まず一つ目は、「多様な意見を尊重する」ことである。松下村塾は身分や学問の浅深を一切問わない塾であり、また講義内容も一斉授業というより、塾生が自分の関心のある学問についてテキストを読んだり議論したりするのが中心であったようだ。それ故、様々な内容やレベルの意見が出てくる。松陰先生は、どのような意見も否定せず受け入れ、それが国のためにどう役だっていくのかを常に考えさせ、行動に結び付けるよう促していたようだ。私も教師になった時に、自分の狭い価値観で生徒の意見に対して善悪を決めつけたりせず、すべての意見を受け入れ、それぞれの意見について真剣に考える教師でありたい。

二つ目は、「常に穏やかに人に接する」ことである。これに

関わるエピソードがある。弟子たちが塾の建て増し工事を皆で行っている際、その中の一人、品川弥二郎が土壁を先生の頭の上に落してしまうという大失態を犯してしまったが、先生は顔色一つ変えられなかったという。そのくらい松陰先生は穏やかな人物であったようだ。

思春期で一番扱いの難しい中学生は、自分もそうであったように、想像もつかないイタズラや失敗をすることがあると思う。どちらかというと短気な面がある自分だが、私も松陰先生のように、生徒の失敗を頭ごなしに否定したり叱ったりせず、生徒に寄り添い、何がいけなかったのか、次に同じ失敗を繰り返さないためにどうしていけばいいのか生徒と共に考えられる教師でありたい。

三つ目は、「生徒の長所を見つけ伸ばす」ことである。松陰先生は弟子一人ひとりの長所を見つけ伸ばす天才であった。高杉晋作の行動力、久坂玄瑞の知力、伊藤博文の調整力など、一人ひとりの長所を見つけ、ほめ、伸ばし、互いが高め合うように競わせてもいた。また、野山獄入牢時代、長年の牢獄生活に人生の目標を見失い自暴自棄になっていた十一人の囚人たちを、それぞれの得意な分野で先生に仕立て上げ、互いに学び合い、生きがいを取り戻させたのは有名な話である。人は、自分が認められれば、自信を取り戻し前向きに歩んでいける証拠である。

現在、日本ではいじめによる自殺者が後を絶たないが、その原因の一つに、私は、人間は他人の短所を見つけやすく、長所を見つけにくいという性質があると考える。一度その人の短所を見つけてしまうとそればかりが目についてしまう。そこから、相手を受け入れようとせず集団的にいじめが始まるのではないかと思う。だから日頃から人の良いところを見つける機会を設けることで、短所よりも長所に目がいく人を育成したい。

四つ目は、「何のために学問をするのかを常に自分に問う」ことである。勉強は嫌いだが成績のために勉強するという人が正直なところ多いのではないか。それは悪いことではないが、そのままでは、いつしか何のために勉強をしているのかわからなくなる時が来る。

松陰先生は、志を立てて万事の源とするよう言われている。

だから私は、自分が将来いかに生きていくべきなのかを考えるために学ぶということを教えたい。そうすれば成績にこだわらず、自分が興味をもったことや疑問に思ったことを、自ら調べ学ぶということによって、本当の学ぶという意味が分かり勉強が好きになるのではないかと思う。

五つ目は、「果敢に行動する」ことである。松陰先生は、ひとたび思い立てば、困難を顧みず、弟子と海外渡航を試みるなど、私たちには考えられないほどの行動力があった。私も、行動力にはある程度自信があるが、生徒たちにもしっかりと行動力を身に付けてほしい。特に困っている人を助ける行動力を身に付けてほしいと思う。例えば、学校に来るのが難しい生徒がいたら、積極的に声をかけてほしい。「明日一緒に行かない？教室まで一緒に行こうよ！」その一言でその子は学校に来ることができたり、笑顔が増えたりするかもしれない。思っているだけでなく、それを行動に移さなければ何も始まらない。まさに松陰先生の言われる知行合一の精神である。

以上の五点を胸に、私は、教育者として尊敬する吉田松陰先生が生まれ育ったこの山口県で、松陰先生の名に恥じない中学校教師となれるよう、さらに勉強に励んでいきたいと思う。また、勉学だけでなく、様々な行事やボランティア活動に参加し、たくさんの人々とふれ合う中で、温かい心や広い視野、行動力等を備えた人間へと成長していきたい。そして、教師となって、生徒たちに郷土の先人のことをしっかりと伝え、自分の夢や目標をもち、それらに向かって努力ができる生徒をたくさん育てていきたいと決意している。

山根孝中から学んだこと

山口県立萩高等学校
二年　谷口　愛実

「萩に白虎隊地蔵堂がある。」ということを知ったのは、日本史の授業の時だった。白虎隊の奮戦も虚しく、会津戦争に敗れた会津藩士は明治政府により青森に送られ、斗南藩を立てた。彼らはそこで、やませに代表される様々な自然被害に悩まされた。そのため会津の人々の間では、この苦労を負わせた新政府側である長州に対する恨みの念が生まれた。このような説明をした後先生は、「実は萩には白虎隊が祭られている地蔵堂があるんだ。」とおっしゃった。私は敵の霊を慰めているという萩の人々の懐の深さに大変驚いた。この話を聞いて私はどのように白虎隊が供養されているのか興味が湧いたため、下校途中に白虎隊地蔵堂に立ち寄った。お地蔵様にはきれいな花が活けられ、お線香があげられていた。そしてお堂の隅には「白虎隊自刃の図」が掲げられていた。萩のこの空間には、どこか不思議な空気が漂っていた。

私はこの作文を書くにあたり、図書館の「郷土の偉人コーナー」に赴き、題材とする人物を探した。その中で私の目に留まったのは「会津戦争で敵兵も治療した医師」という一文だった。戦地で敵兵を治療するということは、私がこれまで知っていた常識に合わないものだった。その名は「山根孝中」だ。私はその時、初めてこの名前を聞いた。そこで孝中のことをより知るために、参考図書を探した。しかし、孝中に関する記述は『防長医学史』、『吉田松陰と松下村塾生』ともにとても少なかった。そのわずかな資料から読み取れた孝中像は「どんな状況であっても、自分の使命を全うする。」ということだった。

孝中について『萩の生んだ近代日本の医政家山根正次』には、「(孝中は)明治元年会津征討軍の軍医として従軍したが、その時長州兵だけでなく会津の婦女子まで診療し」たと記さ

れていた。これを読んだ私は、とても勇気ある行動だと思った。戦況は官軍である長州勢が優勢であった。長州勢の陣では「勝利を手に入れよう」という士気がとても高まっていたはずだ。その中で「敵の婦女子に治療を施す」という孝中の行為は、兵士たちに「敵を倒すことが目的であるのに、敵を救ってどうするのか。」という反感を生んだだろう。しかし孝中は周りに流されることなく、「命を救う」という医者の使命を全うした。

もし私が孝中の立場に立ったなら、どうするだろうか。そう考えていた時、私はある出来事を思い出した。私が通う萩高校は世界遺産である萩城下町の中心に位置する。そのため下校時には観光客の方を多く目にする。ある日私は下校中に、地図を片手に周囲をキョロキョロと見る女の人を見かけた。私は、「もしかして、道に迷っているのかな?」と思ったが、「友達にこの景色を見られたら、いい子ぶっていると思われるんじゃないか。」と思い、女性に声をかけることができなかった。その時の私の使命は「萩に住む自分が、困っている観光客の方に道を教えること」だったが、周りの目が気になった私は、できなかったのだ。孝中の話を知って、私は、この体験を見つめ直してみた。孝中は「人からどう思われるか」という自分のことではなく、「医者である自分がすべきことは何か」という他者のことを第一に考えた。そして何より孝中は、人の命に「敵味方」という区別をつけなかった。この孝中の博愛の精神は萩の「白虎隊地蔵堂」に似ていると思う。萩の人々は地蔵堂で敵であった白虎隊の霊を供養している。敵であれ味方であれ、人の命が一つ失われたことには変わりないという、孝中のような「どんな人も平等」であるという精神を感じた。

また、『防長の隠れた「偉人」たち』には孝中について別の記述があった。「孝中は松下村塾を主宰する吉田松陰のもとに入門する。孝中は文政六年（一八八二）の生まれで当年三十六歳。とっくに修学の年齢は過ぎていたものの、何かをせずにはいられなかったのだろう。松下村塾生中の最年長だった。」このエピソードからも、「どんな状況であっても、自分の使命を全うする」孝中の姿勢がよくうかがえた。私も口では「学問を学ぶ上で、身分も年齢も関係ない」と言えるが、孝中の

ようにプライドを捨てて、若者たちと机を並べることはできないと思う。

私は、新聞部に所属しているのだが、学校新聞を発行する前は部員みんなで合評会をする。合評会では部員同士で自分たちが書いてきた原稿について意見を交換する。自分の文章を客観的に見てもらうことで、文章をレベルアップさせる絶好の機会であるのだが、もちろん、自分の原稿に対する称賛よりも、ダメ出しのほうが多い。私は後輩から原稿に対する指摘を受けた時に、「後輩なんだから、遠慮しなよ。」とつい思ってしまった。合評会での私の指命は「人の意見を聞いて、自分の文章を向上させる」ことであったが、「先輩なのに。」という余計なプライドが私を邪魔した。しかし孝中のことを知り、自分の情けなさを痛感した。孝中が「学問を学ぶ」という自分がやるべき使命だけを実践するために、どんな人とも対等に接したように、「プライドを捨てる勇気」を持つことが必要だと思った。

私たちが生きていくこれからの社会は「予測ができない時代」とよく言われる。地球温暖化、人口爆発、ＡＩの発展はもちろん、私たちの身近なところでも、少子高齢化、過疎化などの沢山の問題がある。そのような複雑化した社会で重要になることは、「どんな状況であっても、自分の使命を全うする。」という孝中の志ではないだろうか。孝中はこの志を実行するために、人には平等に、自分も人と対等に生きた。

私は、どんなに激動の時代になっても、この精神を忘れないようにしたい。

郷土の先人「正木退蔵」に学ぶこと

山口県立萩高等学校
二年　田村　和輝

三年前、親の仕事の都合で英国に引っ越す私に、英語教師だった歴史好きの祖父が、私の故郷である萩と英国との関係について話してくれた。一八六三年に日本人として初めて英国に密航留学した長州ファイブのこと、一九〇二年に日英同盟を締結した時の日本の首相が萩出身の桂太郎であったこと、そして、萩の誇りである吉田松陰の伝記を世界で初めて発表した人が『宝島』などの作者として世界的に有名な英国の文豪ロバート・スティーヴンスンであったことなど。その時、祖父は私に「しっかり英語を学んで、これがスラスラと読めるようになるといいな。」と言って、スティーヴンスンが松陰について書いた『ヨシダ・トラジロウ』をパラパラと見せた。ほんの十六ページ程度の英文を見ながら、全国的に有名な松陰の伝記を日本人ではなく、英国人が初めて書いたということに驚き、とても不思議に思ったことを覚えている。

渡英後、萩や松陰のことを知っている英国人には出会うことはなかったが、スティーヴンスンや彼の著書『宝島』は、たいていの人が知っていた。「そんな人に最初に伝記を発表してもらえるなんて松陰はさすがだな」と思いながら、そもそも、なぜ英国の作家が、いつ、どこで、松陰のことを知り、なぜ伝記を書くことになったのか、とても気になった。

私と同じような疑問を抱いた人がいた。その著書（よしだみどり著『知られざる「吉田松陰伝」―『宝島』のスティーヴンスンがなぜ？』）を読み、萩藩士だった正木退蔵がスティーヴンスンに、松陰について語ったことが、きっかけだったことが分かった。

正木退蔵は、東京職工学校（東京工業大学の前身）の初代校長やハワイ総領事を務めた明治時代の教育者であり、外交官であった。彼は、萩城下に生まれ、十三歳で松下村塾に入

門するが、わずか数か月の期間しか松陰のもとで学べなかった。三田尻海軍学校で英語力を身に付け、二十六歳で明治新政府により英国へ派遣され、ロンドン大学のユニバーシティ・カレッジで学び、長州ファイブもお世話になったウィリアムソン教授から化学を学んだ。熱心に学び、ウィリアムソン教授の助手を連れて帰国し、東京開成学校（現在の東京大学）で、お雇い外国人教師とともに、日本の若者に化学を教えたそうだ。

その後、三十一歳で海外留学生の監督として再渡英し、外国人教師を求め、スコットランドを訪れた際、エディンバラでスティーヴンスンと偶然出会い、松陰について語ったそうだ。

スティーヴンスンは、退蔵の話に感銘を受け、後に「生命を生き生きとさせてくれる日本の英雄」として、『ヨシダ・トラジロウ』と題した松陰の伝記を書き上げたそうだ。

私は『ヨシダ・トラジロウ』の中で、印象に残っている部分が2つある。一つは「教育に対して情熱を傾けていたからこそ、自然の疲れによる休息までもヨシダは惜しんだ。本を読んでウトウトしてくると、それが夏のことであれば、袖の中に蚊を入れてみたり、冬であれば履物を脱いで雪の上を裸足で駆けてみたりした。」そして、もう一つは「大丈夫寧ろ玉となりて砕くべし、瓦となりて全すること能ず（中略）サクマのように、ただ自分だけ助かろうとする人物よりも、ヨシダになって消え去るほうがよい。」

スティーヴンスンの記述はとても詳細で、大変感銘を受ける内容だった。私は、退蔵の伝え方が上手であったからに違いないと思った。スティーヴンスン自身も、文中で「この話は教養ある日本人の紳士、正木退蔵氏が、彼の尊敬する人物を感動的に私に語ってくれたものだからである」と書いている。

退蔵は、十三歳という若さで、また、わずか数か月という短い期間にもかかわらず、尊敬する松陰と松下村塾での教育、そしてほかの塾生とのやり取りなどを鮮明に覚えていたのだ。その上、外国で初めて出会ったスティーヴンスンに、英国で、しかも、詳細にわたって、相手に理解できるように丁寧に説明したのだ。退蔵の熱意とコミュニケーション能力の

高さは、素晴らしいものであったに違いない。もちろん、退蔵は、お雇い外国人講師の「スカウトマン」としても、当時の日本を代表して派遣されていたのだから、話術や説得力なども秀でていたのだろう。

昨今、「グローバル人材」という言葉をよく目にする。文部科学省のホームページには「グローバル人材とは日本人としてのアイデンティティを持ちながら、広い視野に立って培われる教養と専門性、異なる言語、文化、価値を乗り越えて関係を構築するためのコミュニケーション能力と協調性、新しい価値を創造する能力、次世代までも視野に入れた社会貢献の意識などを持った人間」であると定義されている。（産学連携によるグローバル人材育成推進会議による）私は、退蔵は、まさに「グローバル人材の先駆け」であると思った。

私自身、英国で二年間生活する中で、自分の想いや文化の違いなどについて、相手に上手く伝えることができず、何度も悔しい思いをした。英語力という言語能力に問題があったことはもちろんであるが、今振り返ってみると、一番の問題は、相手に伝えたいという熱意と誠実さが欠けていたことだと反省している。

私が通う高校の校訓は「至誠」である。これは「至誠にして動かざる者は未だ之れあらざるなり。誠ならずして未だ能く動かす者はあらざるなり」という松陰の言葉の一部である。「至誠」という言葉を、退蔵をはじめ多くの先人たちが生きる指針としてきたのだろう。

私も、退蔵の熱意と誠実さ、そして多くの先人たちが生きる指針としてきた「至誠」を胸に、真の「グローバル人材」となれるよう努力していきたい。